

## 「カノープスに挑む(2)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

カノープスの赤緯は「 $52^{\circ} 41' 44'' S$ 」である。赤緯(せきい)というのは、天球上の緯度のようなもので、「天の赤道から視角度で何 $^{\circ}$  離れているか」という値である。天の北極(北極星の近く)が「 $90^{\circ} N$ 」、点の南極が「 $90^{\circ} S$ 」となる。恒星も固有運動をして、地球からの見かけの位置(星座のどこにあるか)は、年々変化しているが、その動きは無視しても良いほどゆっくりなので、特定の恒星の赤緯も変化はしない。

特定の赤緯にある恒星を、地球上の任意の位置から観測できるかどうかは、その恒星の赤緯と、観測地の緯度の関係で決まる。カノープスは赤緯の値が「S」なので、南半球では全域で観測可能である。しかし、北半球では、ある緯度よりも北では、観測できない。地平線や水平線が邪魔をするからである。



「昇る北斗七星」(埼玉県滑川町二の宮山山頂で撮影)

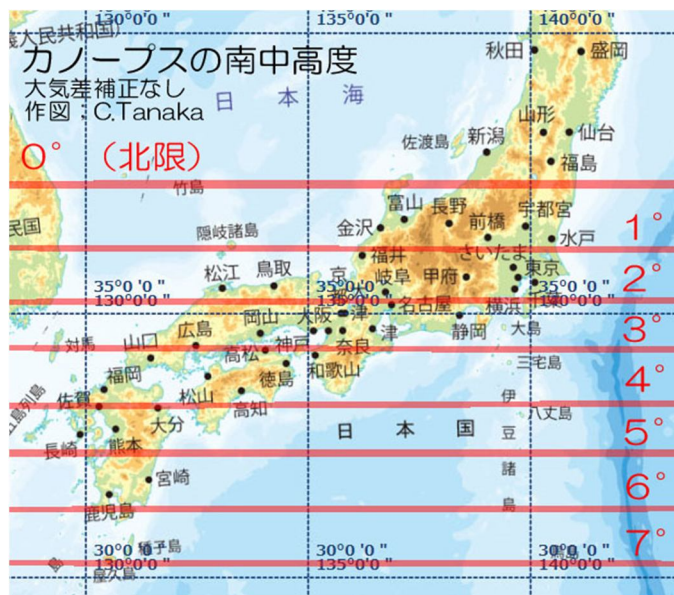
北斗七星は北半球全域で観測可能で、東京都心でも簡単に見ることができる。しかし、オーストラリアでは、ほとんど見ることができない「幻の星」である。

カノープスの限界緯度は、以下のように計算できる。

$$90^{\circ} 00' 00'' - 52^{\circ} 41' 44''(S) = 37^{\circ} 18' 16''(N)$$

つまり、カノープスは北緯  $37^{\circ} 18' 16''$  よりも南でな

ければ観測できないことになる。福島県南部ということになる。計算上は、関東地方では全域で観測可能である。しかし、そう簡単にはいかない。



上図を見ると、東京では南中高度が  $1.5^{\circ}$  程度なので、簡単に観測できそうに思える。しかしこの南中高度は、あくまで計算上の理論値である。「完全に晴れていて」「地平線(または水平線)に山や丘がなく」「人工的な障害物もなく」「光害もない澄んだ空」ではじめて見られる南中高度だ。実際にこの条件を満たす場所(観測地点)は、島嶼や海岸を除けば、関東地方ではほとんど無い。実はこの「観測のしづらさ」こそが、逆にカノープスの魅力となっているのである。

国立天文台副台長の渡部潤一博士は、NHKの番組で、以下のように述べている。

カノープスはりゅうこつ座という星座にありますが、この星座自身が南に低い星座です。ですから、この星は福島県あたりから南ではないと見ることができない星なのです。私の生まれが福島県の会津若松だったので、会津若松からは山に邪魔されて見えない、つまり憧れの星だったのです。

実は、自宅を建てる時にこの星が見えるように場所を選んで、場所を探して建てたのです。そこから見るカノープスというのは本当に地平線を這っていくように見えるので、毎年お正月前後に見えるのを私自身楽しみにしています。

「カノープスが見える場所」を選んで、自宅の場所を決める・・・私には博士の気持ちがよくわかる。そこまでしてでも、この星を身近に感じたい・・・そういう願いの現れなのだろう。